北九州市立
文学館
Kitakyushu
Literature Museum

目次

第2号　2007.9.25

- 「ちょい不安館長」の独白……1
- 第二回特別企画展「作家の自筆原稿でたどる〈文学・青春〉展」……2
- 高樹のぶ子さん講演会「文学と青春」……2
- 企画展「ズッコケ三人組ワールド ハチベエ・ハカセ・モーちゃんがやってきた!」……4
- お話し会「ズッコケ先生、那須正幹さんと話そう」……4
- 「ズッコケ三人組」作品朗読劇……5
- 角野栄子さん講演会……5
- ボブ・サム&伊藤比呂美ストーリーテリング……5
- 北九州の児童文芸誌「小さい旗」五十年のあゆみ展……5
- 対談「自分史を語ろう」……6
- 佐木館長のたのしい文章教室……7
- クイズラリー「めざせ!文学館博士」……7
- 資料寄贈・寄託者……8
- 予告:古川薫さん講演会……8
- 高橋睦郎さん講演会……8
- みんなおいでよボエムの国へ……8
- 文学館文庫の出版……8

「ちょい不安館長」の独白

館長　佐木隆三

二十七歳のとき八幡製鉄所を辞めて、いわゆる筆一本の生活だったから、勤務先というものはありませんでした。それがどうしたことか六十九歳で市立文学館館長を仰せつかり、週に三日を目安に「出勤」しております。

門司区の山小屋で暮らし、早起きして畑仕事をして、一風呂浴びて徒歩で山を下り、JR門司港駅から西小倉駅まで行き、少し歩いて文学館に着き、受付係に「きょうは何人くらい?」と、まず来館者数を聞くのです。

そうして、数字が良ければ目の前が明るくなり、良くなければ落ち着きません。そのような日常ですから、「どうすれば文学館に足を運んでもらえるのか」と、考えないわけにはいきません。

急いで断っておけば、作家というものは「どうすれば本を買ってもらえるか」と、悩んだりしないものです。書かずにはいられないから書いて、それが読者に受け入れられなかったら、あきらめるしかない。読者に媚びるようになったら、自ら作家生命を絶つようなものです。

しかし、文学館は公共の施設であり、皆さまの税金でまかなわれています。そうであれば、「立派なものをつくったんだぞ」と、ふんぞりかえってなどいられない。機会あるごとに文学館の宣伝をして、来ていただく努力をしなければなりません。

ビッグネームの講師の集客力に頼ることも必要ですが、やはり地味な努力の積み重ねが大切でしょう。そう思って夏に催したのが、「たのしい文章教室」と、「自分史を語ろう」でした。

子どもさんの文章は発想が豊かで伸び伸びとして、「この中からきっと作家が誕生する」と、わたしは確信しました。

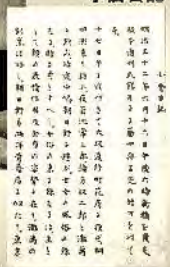
また、ポン菓子機を完成させた吉村利子さん、口演童話で全国を行脚した本村義雄さんのお話を聞き、自分史のヒントを得た人もいたようです。

▲第三回特別企画展「森鷗外展」

北九州は、明治から大正、昭和、そして現在に至るまで、幅広い分野で多くの文学者を輩出しています。その端緒を担った森鷗外は、明治三二年、陸軍第十二師団軍医部長として小倉に着任、離任するまでの二年十ヶ月、勤務の傍ら、地域の教育者や文化人と積極的に交わり北九州に文化の種を蒔きました。

北九州の文化振興に大きな足跡を残した森鷗外を、今回あらためて顕彰し、広く紹介します。

小倉赴任前日


小倉日記

(ともに文京区立本郷図書館鷗外記念室所蔵)

*開催期間＝10月5日(金)～11月4日(日)※月曜日休館
(月曜日が祝日の場合は開館、翌日休館)
*観覧料＝一般四〇〇円、中高生二〇〇円、小学生一〇〇円

第二回特別企画展　3月24日(土)～5月6日(日)

「作家の自筆原稿でたどる〈文学・青春〉展」

「青春」をテーマに、約七十名の作家と作品を紹介。青春を描いた作品や、作家が青春時代に執筆した作品を、一九二〇年代以降の文学の展開に沿って展示しました。川端康成、三島由紀夫、太宰治といった文学史に名を残す作家から、大江健三郎、高樹のぶ子、村上龍、山田詠美など現在活躍中の作家まで、普段目にすることのない貴重な自筆原稿が一堂に会しました。

展示資料＝約二〇〇点
入場者数＝二七六四人(イベント含む)

高樹のぶ子さん講演会「文学と青春」

4月17日(火)

本展において、芥川賞受賞作「光抱く友よ」の自筆原稿が展示されたことにちなんで、高樹のぶ子さんにお話しいただきました。聞き手は文学館館長・佐木隆三が務めました。また、北九州子ども読書交流センターの仲紀子さんに「光抱く友よ」を朗読していただきました。

◆◆◆

佐木　高樹さんは戦後生まれの女性として最初に芥川賞を受賞されたんですよね。何年か前、金原ひとみ・綿矢りさの最年少同時受賞が話題になりましたが、高樹さん自身は遅く書き始めたんですね。

高樹　人生と格闘するのに必死な二十代で、書き始めたのは三十代。離婚したり子どもの問題もあって、世界を敵に回したような、背水の陣という意識で書き始めました。デビュー作「その細き道」が芥川賞の候補になったのが三十五の時。その頃ようやく再婚もかなって一応人生を再建できたと。その二年後芥川賞を頂きました。

佐木　私の妻は、私の書いたものを全く読みませんが、高樹さんのところはいかがですか。

高樹　うちは読みます。主人は小説好きで、私に送られてくる雑誌も読んで面白かったものを教えてくれる。

佐木　ご主人は法律家だから社会のこともよくご存じでしょう。

高樹　小説の好き嫌いについては、そのことはあまり関係ないようです。私は常にクリエイティブな生活を送ってるけど、あちらは社会の後始末ばっかりしてるっていう。ところで、アメリカみたいに、全てが訴訟の社会になるのは人間としてはどうなんでしょう。裁判員制度が始まると、人ごとではないですよね。

佐木　私は裁判員制度というものに期待しています。硬直化した司法に風穴が空くのではと。

高樹　でも私は守秘義務って無理です。小説家は心で抱え込んだものを出してしまうから。

佐木　守秘義務に反した場合にペナルティーがあるのが納得できない。司法関係者が怖れているのは、職業裁判官の発言をばらされることらしい。

高樹　人間の真実は単純ではないですよね。文学は表に現れないものを解き明かしたり、曖昧なものを人に伝える事ができますね。

佐木　さて、高樹さんは芥川賞

来館者の声

◇　予想通りの字であったり意外な筆跡であったりして楽しかった。(二十代 女性)

◇　茨木のり子さんの自筆で「自分の感受性くらい」を見て、ずっと好きだった詩なので涙が出ました。(四十代 女性)

◇　見ごたえがあって満足しました。改めて読み直したい本がいくつかありました。(五十代 女性)

◇　二度と拝見する事はないと思うと、一つ一つを丹念に見ました。このような企画を何年かに一度はして頂きたいです。若い方に見て頂くと良いのではないかと思います。(五十代 女性)

◇　読書量の多い学生時代を思い出し、楽しく拝見させて頂きました。(五十代 女性)

◇　日本文学の名だたる作家の自筆を見て感動を覚えた。(六十代 男性)

このほか、たくさんのご回答を頂きました。ありがとうございました。

の選考委員のお一人ですが、選考は侃々諤々になりますか。

高樹　一種のバトルです。そして公正さを保つために、内部での発言は記者会見と選評以外では明かしません。文学は数値で表されるものではないですから。選ばれる方も選ぶ方も相対的な関係だと思っています。

佐木　特別企画展の話ですが、高樹さんの原稿のタイトルが、「早春」から「光抱く友よ」に変更されていますね。

高樹　二十何年ぶりに気がつきました。少女達の早春の物語ではあるんですが、「新潮」の編集長に弱いと言われて。もっとフォーカスが合ってるものをという注文で、校了ぎりぎりで決まったっていう記憶があります。まだ文庫本で増刷されていて、去年もテレビドラマになりました。恋愛小説でも華やかなものでもなく、地方の高校生の話で、今に受ける要素はないと思ってましたが、現在もこういう少女達の問題や悩みはあるのかもしれません。

高樹のぶ子さんと佐木館長

佐木　高樹さんのお出しになった本で、一番たくさん売れたのは何ですか。

高樹　長く売れ続けてるのは「光抱く友よ」でしょうね。でも、今は本が売れないし、読まれなくなっている。アナザーワールドに遊ぶ心の余裕がないのかしら。子供の頃に何か読みふけったりする時って、別の人生に飛び込んじゃってる。その楽しみのためには眼で活字を追う習慣がないと。「遊ぶ」事で、一番学べるんだと思います。楽しいものじゃないと体に入ってこない。私の「水脈」はダイビングで遊んで海や水の感覚を感じたから生まれました。「透光の樹」は恋愛小説で、頭で作ったんじゃなく、恋愛を楽しんだり苦しんだりした中から出てきたもの。体で感じたもの、「肉体的感情」って私は言うんですけど、特に女性は「肉体的感情」を持ってます。感情ってハートとか頭であるようだけど、寒い時は心も凍るし、暑い日差しの中だと心も溶け出していく。人間の頭や精神は五感で支配されています。感情は頭じゃなくて肉体から出発してるものだと実感しています。

佐木　森鷗外が遊びという言葉をよく使っていました。

高樹　漱石も鷗外も文豪と呼ばれる人達は、日本は、あるいは人間はどうあるべきかという壮大な質問にも、自分の答えを用意していました。今の小説家は、そんな問いかけに答えは出ないと思ってる人もたくさんいます。個人的で完結した世界があれば、存在が許されるという時代になったのかしら。

佐木　九州大学特任教授として「SIA」というプロジェクトを始められたきっかけは。

高樹　大学も、もっと社会との交流が必要だという認識が出てきて声がかかりました。私は文学を教えることはできないから、クリエイティブな仕事として九大に関わることができればということで引き受けました。今までにアジアの三カ国を訪れ、新聞や雑誌、テレビ、シンポジウム、webなどメディアを網羅して成果を発信しています。アジアは植民地支配との戦いの中で文学が生まれていますから、逆に日本における文学の現状の脳天気さが見えるような気もしています。

北九州芸術劇場・小劇場
参加者約一七〇人

文学講座

3月31日(土)～4月28日(土)

本展開催中、研究者の先生方による文学講座を行いました。様々な視点からの興味深い内容で、それぞれの作家像に肉薄しました。

受講者＝各回約三〇人

◎中原豊氏(中原中也記念館副館長)
「中原中也―生誕百年を迎えて―」
◎久保田裕子氏(福岡教育大学准教授)
「三島由紀夫『潮騒』―戦後の青春と恋愛―」
◎北川透氏(梅光学院大学副学長)
「谷川俊太郎の宇宙感覚について」
◎松本常彦氏(九州大学大学院教授)
「葛西・石坂・太宰」
◎石田忠彦氏(鹿児島女子短期大学学長)
「川端康成の青春・その後」

北川透氏

▲企画展 7月14日(土)～9月2日(日)

「夏休み ズッコケ三人組ワールド ハチベエ・ハカセ・モーちゃんがやってきた！」

世代を超えて愛されている児童文学の名作「ズッコケ三人組」シリーズを紹介する企画展「夏休みズッコケ三人組ワールド」を開催しました。

「ズッコケ三人組」全五〇作を一堂に集めて展示。三人組のプロフィールや作品の歴史を紹介し、作者の那須正幹さんの自筆原稿や前川かずおさんによる挿絵原画も展示しました。また、那須さんの主な著作約一五〇点を集め、その作家像にも迫りました。

会場では那須さんへのメッセージカードが入場者から寄せられました。「学校の図書室でよみました。全巻よみたいです」、「子どものころに読みました。今は我が子と読んでいます。親子でズッコケファンです」など四五〇点にもなりました。

展示資料＝約一五〇点
入場者数＝四一一二人(イベントも含む)

お話し会「ズッコケ先生、那須正幹さんと話そう」

8月4日(土)

作者の那須さんによるお話し会を開催しました。親子連れや児童文学関係者などが集まり、会場からの質問に、「ズッコケ三人組」の執筆秘話、作家の生活、育児など、ユーモアを交えてお話しくださいました。

「ぼくはハチベエが好きですが、先生は誰が好きですか」という質問には、「三人の少年にはモデルがいる。ハチベエは、書道塾をしていたときの生徒。モーちゃんは、中学校時代の同級生。ハカセは、那須正幹の少年時代をモデルにしている。ハカセと同じようにぼくもトイレで本を読むのが癖。自宅のトイレには本棚がある。ということで、那須正幹は自分がモデルのハカセが好き。ハチベエがお話の中では目立っているが、一番の最後のおいしいところはハカセが持っていく。君もハカセを好きになりなさい（笑）」。

「那須先生の本を読んで小説家になりたいと思って勉強しています。キャラクターづくりはどうしていますか」という熱心な質問には、「登場人物のプロフィールをかなり詳しくつくる。主人公だけでなく登場人物も。最初はイメージがわかないけれど、書いているうちに主人公が頭の中で勝手に動き出すようになる。そうなると主人公の跡を追うように書けばいいので楽。私の場合は、最初に作品の舞台になる地図もつくります」。

また、「ズッコケでは、ハチベエ・ハカセ・モーちゃんを一度もアジア太平洋戦争にタイムスリップさせていない。最初は無意識だったけど途中からは意識して三人に戦争中の日本を体験させたくないなあと思った。

来館者の声

◇ファンタジー好きです。なんでもできるハチベエたちすごいな。（小学三年）

◇わたしは、「ゆめのズッコケしゅうがく旅行」を読んでしゅう学旅行が楽しみになってきました。しゅう学旅行にはやく行って思い出をつくりたいです。（小学三年）

◇「ズッコケ三人組」が大好きです。特にハチベエが大好きです。これからも楽しい作品をかきつづけてください。（小学六年）

◇那須さん、いままでおつかれさまでした。僕はいままで本は嫌いでした。でもこの本を読んで本はおもしろいと思いました。これからもズッコケだけでなくいろいろな本で世界中の人を幸せにしてあげてください。（中学一年）

◇小学生の子どもと夫と来ました。家族で楽しむことができ共通の話題が増えてとてもよかったと思います。那須先生の世代を超えた長年の活躍のおかげです。（三十代女性）

◇ズッコケ三人組を通してそこに語られない先生の平和に対する思いが伝わってきました。（三十代女性）

ハチベエなら先生にたたかれている。モーちゃんなら軍事訓練で怒られて、ハカセなら戦争は間違っているといって特高ににらまれているだろう。三人が元気に駆け回れるのは、日本が平和で民主的だから。変な国になったときには三人組が元気に駆け回れる世界がなくなってしまう。今の子どもというより、若いお父さんお母さんへ、ぜひとも今の憲法だけは守ってほしい」と、平和への切なる願いも訴えました。

会場は、那須さんと子どもたちの楽しい対話で温かい空気に包まれました。

参加者約八〇人

那須正幹さん

「ズッコケ三人組」作品朗読劇

7月29日(日)、8月19日(日)、26日(日)

北九州子ども読書交流センター（代表 仲紀子）のみなさん、ナレーターの宮崎暁子さんによる「ズッコケ三人組」作品朗読劇を開催しました。第一作『それいけズッコケ三人組』から「三人組登場」を取り上げ公演。ハチベエ・ハカセ・モーちゃんのゆかいなやり取りを上演し、クイズや那須さんの著書を紹介するブックトークも行われ、会場に集まった子どもたちと作品の世界を楽しみました。

参加者各回約五〇人

角野栄子さん講演会「ちいさなどうわたちーみんないっしょにワクワクしよう」

8月17日(金)

「魔女の宅急便」で知られる童話作家・角野栄子さんによる講演会を開催しました。今年、「角野栄子のちいさなどうわたち」と題した幼年童話集のシリーズ六冊を刊行。自作の朗読を交えながら、子どもが自分自身で本を読むことを大事にしてほしいという思いを語られました。

北九州芸術劇場・小劇場
参加者約一七〇人

角野栄子さん

ボブ・サム＆伊藤比呂美ストーリーテリング

8月10日(金)

写真家で作家の星野道夫（一九九六年取材先でヒグマに襲われ急逝）が愛したアラスカの先住民族に伝わる口承詩の世界を紹介する催しを、熊本近代文学館との連携により行いました。

アラスカ先住民族の語り部ボブ・サムさんと詩人伊藤比呂美さんの語りに、会場は、自然の中で星野道夫も一緒に座って聞いているような雰囲気に包まれました。

インタビュー誌「SWITCH」の発行人で、星野道夫にインタビューを重ねた新井敏記さんも途中から加わり、予定時刻を過ぎても話は尽きませんでした。

参加者九二人

ボブ・サムさん

伊藤比呂美さん

北九州の児童文芸誌「小さい旗」五十年のあゆみ展

7月14日(土)～9月2日(日)

北九州の児童文芸同人誌「小さい旗」の創刊五〇年を記念した展覧会を開催しました。

「小さい旗」は、みずかみかずよら多くの児童文学作家を生んだ全国でも有数の同人誌。一九五五年の創刊から長く北九州の児童文学を牽引し、今年七月には通巻一二四号を刊行しました。

本展では、同人による著書や関係資料などを展示し、同人のプロフィールと「小さい旗」の歴史を年譜で紹介しました。

「小さい旗」主宰　水上平吉さん

▲対談「自分史を語ろう」

7月1日(日)・15日(日)

館長佐木隆三がホスト役を務める対談「自分史を語ろう」を開催しました。

北九州市自分史文学賞をはじめとする「自分史文学」の情報発信拠点として、様々な分野で活躍する市民の方に自分史をお話しいただきました。

【第一回】

*お話＝吉村利子さん（株式会社タチバナ菓子機代表取締役）

記念すべき第一回目のゲストの吉村利子さんは、終戦直後から現在まで六十年以上にわたって、北九州の町工場からポン菓子機の製造と普及に尽力されています。

今回の対談では、ポン菓子機の原型である穀類膨張機との衝撃的な出会いや、当時の女性としては珍しい物理学を専攻した経緯、教員として教壇に立った小学校での苦労…などなど、ポン菓子機に携わる以前のお話からじっくりと聞かせていただきました。そのほか、職人だった亡き夫との思い出や、七十針を縫う大怪我を負いながらも工場に立ち続けた体験など、ポン菓子機製造の傍ら製鉄の下請けとして工場を切り盛りしていた時期についても、ユーモアたっぷりにお話ししてくださいました。

吉村利子さん

ポン菓子機の実演活動を通して日本のみならず世界を飛び回っている吉村さんだけに、各地で出会った子どもたちについて話が及ぶと、「世界にはいろんな国があって、どれだけ言葉が違っても顔が違っても、どこかで通じている」と、満面の笑顔。その表情が、ポン菓子機製造のきっかけとなった「子どもたちに消化の良い食べ物をお腹いっぱい食べさせてあげたい」という情熱に六十年経った今も変わりはないことを伝えていました。

会場には、工場時代の吉村ご夫婦を知る方々も多数来場され、時に笑い、時に涙ぐみながら、皆さん懐かしそうに吉村さんのお話に聞き入っていました。

参加者四四人

【第二回】

*お話＝本村義雄さん（児童文化車くまごろう号主宰 北九州児童文化連盟副会長）

当日は、台風が通り過ぎたばかりの生憎の雨模様。しかし、「くまごろうさん」こと本村義雄さんが話し始めた途端、その朗らかな声に引き寄せられるように人が集まり、あっという間に会場はたくさんの来場者で埋め尽くされました。

児童文学の口演活動で知られる本村さんが初めて「口演活動をしながら全国を行脚したい」との夢を持ったのは、まだ十代だった小倉師範学校時代。その夢が「くまごろう号」という形となって結実したのは、それから四十年近く経った五十五歳のとき。時に第一回ゲストの吉村さんから購入したポン菓子機を相棒にしながら、日本全国を周回すること五回。訪れた市町村は、一四六〇箇所を超えました。

そんな本村さんを傍で支え続けたのが、同行した妻の淑子さん。様々な困難が伴うことも多い旅の最中にあって、「幸せのメガネをかけて旅をしましょう」「お会いする一人一人の方から素晴らしい色糸を一本ずついただいて、錦織に織り上げてゆくような旅にしましょう」といった淑子さんの前向きな言葉が、本村さんにとって大きな力になったそうです。

本村義雄さん

妻の淑子さんをはじめ、人生の節々で出会った恩師、活動に理解を示してくれた上司…多くの素晴らしい仲間に恵まれ、長い時間をかけて十八歳の時からの夢を実現させることができたご自身について、「ラッキーボーイですな」と笑ってみせた本村さん。その表情はまさに、日本中で慕われる「くまごろうさん」そのものでした。

参加者四一人

▲「自分史ギャラリー」展示入れ換えのご案内

「北九州市自分史文学賞」歴代受賞作の中から一作品を取り上げて、その作品世界を展示で紹介する自分史ギャラリーが、十一月十日から模様替えします。

今回取り上げるのは、平成十二年度自分史文学賞で佳作と北九州市特別賞をW受賞した山田辰二郎さんの「門司発沖縄行きD51列車発車」です。鉄道の無い沖縄にSLを贈ろうと奮戦した鉄道マンの自分史。この機会に、「自分史文学」の面白さと奥深さを是非、体験してください。

佐木館長のたのしい文章教室

【小学生の教室】
7月22日(日)
〔低学年の部〕〔高学年の部〕
【中学生の教室】
7月29日(日)2回

始まったばかりの夏休み。文学館は、朝から子どもたちの元気な笑い声で包まれました。

佐木館長の「未来の作家を育てたい」という思いがかたちとなり、文章教室が開催されました。

参加希望者には事前に、「私の夢」というテーマで原稿用紙一枚分の作文が課され、それを館長自らが審査・選考し参加者を決定しました。

「作家」「医師」といった人気の職業から、「にんじゃけいさつ」や「課長になりたい」というユニークなものまで、子どもたちの夢のかたちは様々です。教室では、まず原稿用紙に詰まった「私の夢」を、子どもたちに読み上げてもらいます。その作文ひとつひとつ、夢のひとつひとつに、時に、参加者とのやりとりを織り交ぜながら、館長がアドバイスや感想を述べました。教室の最後には、館長から参加者全員に修了証が手渡されました。

教室終了後も、文学館の見学や記念撮影と、〈未来の作家〉たちはさかんに動き回って、あらゆるものを吸収しているように見えました。中には、館長に取材を求める〈未来のルポライター〉の姿も。教室に参加してくれた子どもたちの中から、真の作家やルポライターの生まれる日が、今から楽しみです。

また、寄せられた作品はすべて、夏休み期間中、文学館内にて展示。作品には審査した佐木館長による直筆のコメントが寄せられ、来館者の関心を集めていました。

参加者各回一〇余名

アンケートより

◇ 自分の本をつくったりしたい。（小学生）

◇ わたしは作家になりたくて、いろんな応募をしています。また来たいです。（小学生）

◇ 作家という職業もおもしろそうだと思いました。（中学生）

◇ これからも、作文など心を込めて書いていきたいと思います。（中学生）

◇ 「ここがおかしい」など、悪い所を言われなかったので、本当に自信を付け、今後はのびのび文章を書けると思います。（保護者）

◇ 長い文章を書く機会がなく、今回はじめて四〇〇字に挑戦！子どもたちの素直な文章に私も心が温かくなりました。（保護者）

◇ 作家さんならではというか、よくありがちな優等生的な文ではなく、少しおもしろい感じの文章が選ばれていて、「ほう」という感想を持った。（保護者）

◇ 「生徒の夢」を改めて聞いて、新鮮さと喜びを感じました。（引率者）

クイズラリー「めざせ！文学館博士」

8月19日(日)・26日(日)

北九州の文学を楽しく学ぶ、クイズラリー「めざせ！文学館博士」を開催しました。「火野葦平は若松の家になんという名前をつけたでしょう？」、「みずかみかずよの詩に出てくる『あかいカーテン』ってなんのこと？」などの問題に小学生から大人まで挑戦しました。「クイズがあるので、普段よりもじっくりと観覧できてよかった」と参加者から好評でした。

参加者各回約一〇名

◎資料寄贈・寄託者（平成十九年八月現在）

青木克見　青木新六　朝野富三　麻田辺聖子　玉井闘志　玉井史太郎
生久　安部齋　阿部誠文　天川悦子　田村豊　田原ツヤ子　千々和昭男
有吉巍　安藤諒二　安間隆次　石昌　津島啓作　土田晶子　鶴島正男　出
子　石川一歩　石川湍　石田恵子　磯　水玲子　寺井谷子　道前孝雄　戸川
野学　板谷良二　伊藤隆　井上カヲ　久美　戸切冬樹　中尾三朗　中川屺
ル　今井敏博　今川英子　今崎正子　城子　永島涼子　中西輝磨　中野加
今村元市　いよやよい　岩森道子　代子　中野裕夫　中原厚　中原澄子
上田喜久雄　上野ヒサ子　梅田利　中村憲二郎　中元大介　野村敬子
行　浦橋勝信　大石聡美　大貝晃章　波佐間義之　橋本美代子　八田昴
仰木茂　大迫豊　大島公生　大沼幸　花田理枝　濱田源一郎　林福江　原
孝　大原清子　大村照子　岡武子　岡　田暎子　原田ヨシ子　半澤励子　東
口茂子　岡田武雄　岡本瑤子　沖野　昭徳　樋口大成　久富芳　久野文雄
邑江　荻原稔　奥睦美　小倉八重　小　平出隆　平田信重　深田俊祐　深堀
畑智恵　折世凡樹　風木雲太郎　柏　正平　深見清子　福本弘明　藤井北
木恵美子　加藤一夫　要二三代　亀　灯　藤木良憲　藤沢加代　藤平幸夫
石恒子　亀井謙三　川原洋子　菊竹　古田祐臣　古谷龍太郎　星加輝光　星
閣三　岸原清行　北伸江　久我秀茂　野允伸　細野豊　舞原克典　前山禮次
雲岡処平　倉本士誓　倉本美代子　増岡康毅　増田連　松井満　松尾房代
栗田藤平　黒岩貞治　向野利彦　河　松村友視　松本常彦　丸山重　馬渡博
野頼人　小島敬三郎　兒玉充代　後　親　水上平吉　宮城しず　武藤幸子
藤みな子　小林慎也　小林年子　小　村上恭一　村田喜代子　村田幸子　毛
林博　佐折啓　坂井愛子　坂口良彬　利香代子　木匠葉　本村義雄　森信一
坂本勝　佐木隆三　佐々木博子　佐　森田稔　柳生じゅん子　矢富巌夫　柳
藤順子　佐藤真　執行基昭　品川洋　田絢子　山口公和　山口欣児　山口秀
子　自見榮祐　杉八千代　須永忠世　樹　山口玲子　山崎薫　山崎周作　山
良俊明　宗香　園田豊　高碕健二　鷹　下清六　山下敏克　大和修　夢野良平
取美保子　田島安江　巽一雅　田中　和田精吉
九州男　田中信一　田中万知子

（五十音順・敬称略）

―皆様ご協力ありがとうございました。

予告

▲「高橋睦郎さん講演会」

北九州市出身の詩人、高橋睦郎さんの講演会を開催します。演題は、「『五足の靴』と与謝野寛（予定）」。応募方法など詳しくは、市政だより十月十五日号をご覧ください。

＊日時＝10月21日(日)
十四時～十五時三十分
＊場所＝北九州市立文学館

▲北九州市立文学館開館一周年記念講演会「古川薫さん講演会」

開館一周年を記念して、直木賞作家、古川薫さんの講演会を開催します。演題は、「乃木希典『斜陽に立つ』をめぐって」。応募方法など詳しくは、市政だより十月十五日号をご覧ください。

＊日時＝11月11日(日)
十四時～十五時三十分
＊場所＝北九州市立文学館

▲みんなおいでよポエムの国へ
―現代少年少女詩・童謡詩展―

詩人約七〇人の自筆原稿と自らによる作品解説、イラストレーターによる書き下ろしイラストを展示します。

詩とイラストの織りなすハーモニーが「ポエムの国」を彩ります。

【展示予定作品】

◎少年少女詩
柏木恵美子「蝶」、岸田衿子「みーつけた」、工藤直子「てつがくのライオン」、松谷みよ子「カエル」ほか約四〇点

◎童謡詩
神沢利子「たまごのなかで」、阪田寛夫「サッちゃん」、谷川俊太郎「ののはな」、まど・みちお「ゾウ」ほか約三〇点

＊開催期間＝11月10日(土)～翌年1月6日(日)

▲文学館文庫の出版

現在書店ではなかなか入手できなくなった北九州ゆかりの文学者の作品を出版し、販売しています。

第2巻『林芙美子短編集』
定価1000円（税込み）
11月刊行予定

北九州市立文学館
Kitakyushu Literature Museum

発行　2007年9月25日
北九州市立文学館
〒803-0813
北九州市小倉北区城内4-1
TEL 093-571-1505
http://www.city.kitakyushu.jp

■開館時間
火～金 9:30～19:00（入館は18:30まで）
土・日・祝 9:30～18:00（入館は17:30まで）

■休館日
毎週月曜日（月曜日が休日の場合は翌日）
年末年始

■JR小倉駅より徒歩15分　■JR西小倉駅より徒歩10分
■北九州市役所前バス停より徒歩2分　■北九州市都市高速大手町ランプより2分
■駐車場は文学館最寄りの各有料駐車場をご利用下さい

0731067B